

演題： Minimally Invasive Prosthodontics -M.I.な補綴とは-

抄録： 補綴修復と言えば歯を削って被せたり詰めたりすることがメインであるが、Shillingburg は Fundamental of Fixed Prosthodontics の中で、支台歯形成の原則として”歯質の保存”を挙げている。しかし実際は、マテリアルの強度や色調の再現、保持形態や抵抗形態のためにある程度の歯質削除は必要で、歯科医は常にこのジレンマを抱えている。

M.I.(Minimal Intervention)とは 2002 年に国際歯科連盟で採択された“Minimal Intervention in the Management of Dental Caries”の中で、カリエスに対して最小限の切削でコンポジットレジンのような歯質接着材料を用いた修復の概念である。補綴分野においても、近年の接着歯学の進歩によって従来の保持形態や抵抗形態の概念に捉われない補綴方法が予知性のある治療法として認知されてきた。特に、ポーセレンラミネートベニヤや接着性ブリッジは、最小限の侵襲で非常に信頼できる補綴方法として大変有効である。また最近では CAD/CAM 技術の進歩によりジルコニアを用いた前歯部、臼歯部審美補綴も需要が増している。

そこで今回は私が考える MI な補綴に関して、補綴材料としてのジルコニアの特性と前歯部に対する補綴オプションとして接着性ブリッジやラミネートベニヤの適応症や、その利点、欠点を自身の症例を提示し考察してみたい。

穂積英治 略歴

- 1998年 愛知学院大学歯学部卒業
- 2002年 愛知学院大学歯学研究科博士課程卒業（歯科補綴学専攻）
- 2006年 ポストン大学歯学部補綴科大学院卒業
- 2007年～ 穂積歯科医院勤務
- 2009年～ 愛知学院大学歯学部高齢者歯科学講座 招聘教員
- 2018年 日本口腔インプラント学会専門医 取得